

# C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

現代イタリア事情 -Italia oggi- 第 17 回

＊さらばドルチェ・ヴィータ

～経済危機下の家計事情とライフスタイルの変化～＊

立元 義弘

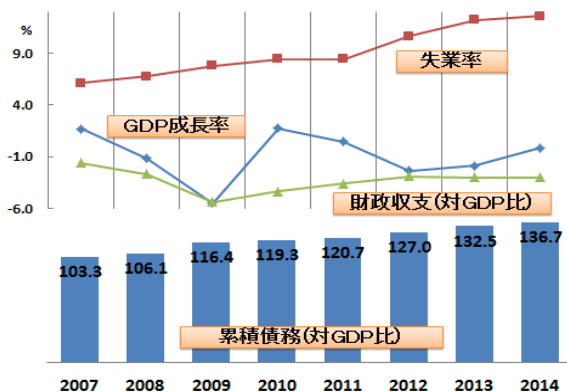
リーマンショックの傷跡もいまだ癒えない 2010 年、今度はギリシャであがった国家経済危機の火の手が南欧を中心としたユーロ圏のソブリンリスク問題へと波及、欧州のみならず世界の経済を揺るがせることとなり、その火種となる国の頭文字をとってPIGSという言葉がメディアを賑わせました。

ご承知の通りPはポルトガル、Gはギリシャ、Sはスペインを指しますが、対岸の火事を決め込んでいたイタリア人は、「ってイタリアのことじゃないよね。」と気楽に構えていました。(実際、当初Iはアイルランドを指していたのは事実ですが。)しかし、そのうちイタリアの国債利回りもドイツのそれと大きく乖離し始め、イタリアの財政危機が大きく取り沙汰されるようになるに至ってPIGSはPIIGSへと姿を変え、「ってやっぱりイタリアのことだよ。」と現実を認めざるを得ない状況になってしまいました。

現在は一時の危機的状況は何とか乗り越えたという一服感はあるものの、リーマンショックから6年が経った今もイタリアはその後遺症に悩まされています。この間失業率は倍増し、赤字の財政収支と増え続ける累積債務という問題を抱えながら、一旦は立ち直るかに見えた経済もこの3年間は再びマイナス成長が続いています。

ムッソリーニの記録を塗り替え、今年2月に39才と1か月の若さでイタリア政権史上最年少の首相に就任したマッテオ・レンツィ氏率いる内閣が、それまで停滞気味であった政治に新風を吹き込み、雇用・家庭・福祉に焦点をあてた様々な改革

の実行を通じて経済の成長軌道への転換を図っています。しかし、今も国民の96%がイタリアはまだ景気後退局面にあり、60%がさらに向こう1年間はこの不景気が続くと考えており、ほぼ3人に1人が毎月の収入だけでは月末の給料日まで持ちこたえることができない「第四週症候群(Sindrome di quarta settimana)」に罹っていると言われ、実際に世帯収入や可処分所得は30年前、家計消費は20年前のレベルに大きく逆戻りし、イタリア人の財布のひもはどんどん締まって行くばかりの状況です。



こうした中でレンツィ内閣は、今年から年収2万5千ユーロ以下の世帯に対して月額80ユーロのボーナス支給を実施、また来年からは新生児が3才になるまで一人当たり同じく月額80ユーロのベビーボーナス(Bonus Bebe)の導入を発表し、消費喚起を呼び水として経済成長に結びつけようと躍起ですが、その効果を疑問視する声は小さくなく、焼け石に水、大海の一滴などと手厳しい批判

にさらされています。(そういえばどこかの国でも定額給付金や子ども手当といった政策に対するばらまき批判がありましたでしたがその効果はどうだったのでしょうか。)

mangiare, cantare, amore(食べて、歌って、愛を楽しむ)という具合に人生を謳歌し、ドルチェ・ヴィータ(甘い生活)を楽しむ術を知る人たちというのが私たち日本人がある種の羨望をもって見てきたイタリア人のステレオタイプなイメージですが、こうした彼らのライフスタイルも長引く経済危機や不況の嵐の中で変わらざるを得ないという状況になって来ています。

一昔前までは、日本のスーパーのものよりもまだ優に一回りは大きなカートにどっさり買い込む消費者の姿が見られたものですが、昨今は不要不急なものではできるだけ買込まない、必要なものを必要な分だけ小分けにして買うというスタイルが徐々に浸透してきています。さらに少々割高だけど馴染みの店でしていた買い物も、チラシの目玉商品を求めて安売り店に走るということが普通に行われるようになってきており、実際に小売店はおろか従来のスーパーからも客足は遠のき、売り上げを伸ばしているのはディスカウント店だけという状況です。

また、夏と冬には多くのファッション・服飾店がそのシーズン製品の最終処分販売を行うサルディ(saldi)と呼ばれるバーゲンセールが各地で始まり、普段は手の届かなかったブランド品が大幅なディスカウントで買えるとあって、多くのイタリア人がこのチャンスにあちこちの店を奔走するのですが、最近のある調査では83%のイタリア人が今やサルディ以外では洋服や靴は買わないと答えています。しかし、そのサルディも今夏の売上は不振に終わり、期待された先述の80ユーロのボーナス効果は全くなかったとの嘆きが小売店の間から聞かれます。

こういう世の中ですからファッションにかかるお金を節約するのはある程度仕方がないことかもしれませんが、緊縮家計のあおりを受けて医療や健康にかかるお金も節約される傾向にあり、中でも最も影響を蒙っているのは歯医者だそうです。多くの人が治療費を節約するために歯の治療を先延ばしにしたり、ブリッジやインプラントなどの

高額先進治療を避けてそれほど費用のかからない普通の入れ歯にしたりするので、歯科医の収入ばかりか関連のビジネスまで約30%の市場縮小となっているとのことです。

夏のバカンスもイタリア人にとっては年間の最重要行事で、経済危機の前までは7月後半から8月の週末ともなるとエソド(esodo)と呼ばれる民族の大移動が起こり、海や山へ向かう家族連れのクルマ、クルマで高速道路は大渋滞というのが毎年夏の風物詩でした。とにかくこの時期如何に小麦色に焼いた肌を誇示できるかが一種のステータスシンボルとなっていたくらいですから。

ところが長引く不景気による家計への影響はここにも影を落としており、今年の夏は3人に1人のイタリア人がバカンスをあきらめ、何とかバカンスに出かける余裕のある人々も安・近・短の傾向が強まっています。

昔なら海へ、山へと多くの住民が出払った後の大都市はゴースタウン化という言葉が決して大げさではないくらいに閑散としたものになり、普段は路上駐車のカルマで埋め尽くされる街の道々も、「エッ、この道こんなに広がったんだ！」と驚いたり、ほとんどの店がシャッターを降ろし、そこに貼られた“Chiuso per ferie(休暇中につき閉店)”を知らせる貼り紙がやたらと目につくものでした。ところが昨今はバカンスシーズンでも休まず営業する大型ショッピングセンターが増え、バカンスに行かずに(行けずに)都市で暑い夏を過ごす家族連れにとって、ショッピング、ローコストレストランでの食事、子供たちのエンターテインメントの場として、涼しく一日を過ごせる絶好の団欒スポットとして賑わっています。

不況・不景気の長期化によってこうした節約行動を余儀なくされているイタリア人家庭ですが、それでも十分でないとなると次の節約のターゲットとなるのは必然的に食料品ということになります。実際に不景気が長引くにつれて食料品の消費も減少してきており、イタリア人の食生活には欠くことのできないパスタやオリーブオイルでさえ売上げが落ち込んでいます。また、ある調査では約半数の世帯が節約のために食費を切り詰めているということで、「我々イタリア人は“強制的ダイエツ

ト”を強いられているのだ。」といった自虐的なジョークも聞かれます。とはいえ、他のものならなしで辛抱できても食料品の量の節約には限度がありますから、前述のように安売り店、低価格・低品質の特売品へと消費者の目が向いてゆくことになり、ある大手スーパーの談によりますと今や40%の商品が特売品で占められているとのこと。



イタリアにもソブリンリスクの火が付いた頃、当時のベルルスコーニ首相は、「大騒ぎする必要は何もない。レストランだって客で賑わっているではないか。」とつぶやきましたが、当然ながら外食における行動形態にも変化が見られます。普段の家での食事は慎ましいイタリア人もたまの外食では、アンティパスト、プリーモピアット、セコンドピアット、デザート、カフェとフルコースでグルメぶりを発揮していたのは今や昔の話。胃袋以上の注文は控えて、前菜とプリーモピアットだけ、あるいはパスタはとばして前菜とセコンドピアットだけですませる人が増えているそうです。中には周囲の目より実をとろうということで、前菜+ピッツアと言った安上がりでお腹を満たせる組み合わせの注文をする人や、食べ残してしまった料理をお持ち帰り用の“ドギーバッグ”にとリクエストをする人など、昔なら“アリ得ナ〜イ”とひんしゆくを買ってしまうような行動をとる人たちが急増中だそうです。

「背に腹は代えられぬ」というところなのでしょう

が、この言い方を和伊辞書で調べると“il bisogno non ha leggi.”と出ていました。「必要なことをするのにルールは要らない」というような意味合いになります。まさしく厳しい経済危機を乗り切り家計を護ってゆくためには何でもありが求められているイタリア人の奮闘ぶりを表すのにぴったりな表現です。過ぎし日のドルチェヴィータ(甘い生活)はいずこへ…。

(大阪大学講師、元パナソニックイタリア社長)

～ギャラリー紹介～

## ドディチタイル

イタリア中部のトスカーナの工房で職人が手描き製作するタイル。色彩豊かな表札やお店の看板、ウェルカムボード、食器など。

タイル表札 12,960 円・飾り皿 2,916 円(税込)より

特典:「コレンテを見た」でタイル表札と看板がタイル本体価格より10%OFF! (2015年1月末まで)

住所: 兵庫県神戸市中央区北野町 3-6-2

電話: 078-262-6811 HP: [www.dodicitile.com](http://www.dodicitile.com)

Facebook: [www.facebook.com/dodicitile](http://www.facebook.com/dodicitile)

定休日: 12月30日～1月3日休



# 『カルヴィーノとアーティチョーク』

## 半人半魚の伝説

第19回

堤 康徳

前回、タッソの『エルサレム解放』の一節を踏まえて書かれた、澁澤龍彦の「文字食う虫について」というエッセイを紹介した。澁澤がイタリア語原文を引用し、自ら日本語に訳した『エルサレム解放』第10歌第66節は、若く美しいイスラムの魔女、アルミーダの唱える呪文によって、宴席の十字軍の騎士が魚に変身するくだりだった。この節の語り手は、イングランド王の息子グリエルモ。アルミーダの捕囚となった50名の騎士のひとりだ。

同じ一節をもう一度読んでみよう。以下の訳文は、澁澤訳を参考にした拙訳である。

魔女が本を読み上げると、私の理性と本能が変化し、

私は命と住みかを変えたくります。

(なみはずれた驚異の力!) これまでにない欲求が沸き起こり、

私は水に飛びこむと、水中深く潜ります。

いったいどうしたことか、両脚が縮んで胴体に吸いこまれ、

両腕は背中に引きこまれてゆきます。

私の体は小さく細くなってゆき、皮膚にはうろこが生えています。

私は人間から魚へと変身したのです。

(Torquato Tasso, *Gerusalemme liberata*, Canto X, st. 66)

こうして、ほかの騎士たちも次々に魚に変えられて、水中に身をくねらせたのだった(第67節)。「両腕は背中に引きこまれてゆきます」の原文は

come l' un braccio e l' altro entri nel tergo.この詩行は、『神曲』地獄篇第25歌112行の Io vidi intrar le braccia per l' ascelle「私は両腕が脇の下に引きこまれるのを見た」を想起させる。地獄篇第25歌では、第7の巢窟の盗賊たちが蛇にかまれて断罪されている。112行は、蛇にかまれた男が、人から蛇に変身をとげる瞬間をとらえた表現である。ダンテは、この歌章で、やはり人から蛇への変身を歌った古代ローマの詩人ルーカヌスとオイディウスの名を挙げ、彼らと競い合うように、このくだりを書いたのだった。

澁澤は、ギリシア神話以来のヨーロッパには、人から蛇への変身譚に比べ、人から魚へのそれが極端に少ないと指摘していた。たしかに日本や中国のほうが、人から魚への変身譚はずっと多いかもしれない。しかしイタリアにも、中世から伝わる半人半魚の伝説が存在する。カルヴィーノが編纂した『イタリア民話集』所収のシチリアの昔話、「魚のコーラ」*Cola Pesce*である。まずその冒頭を引用しよう。

昔メッシーナにひとりの母親がいて、コーラという名の息子がいた。彼は、朝から晩まで海でずっと泳いでいた。母が岸から息子を呼ぶ。「コーラ! コーラ! 陸に上がっておいで、何してるんだい? まさか魚じゃあるまいし?」

ところが彼は、ますます遠くまで泳いでいってしまう。哀れな母親は、叫びすぎて、はらわたがよじれるほどだった。ある日、あまりにも叫びすぎたせいで、哀れな女は、もう叫ぶのがいやになり、息子に呪いの言葉を浴びせた。「コーラ、おまえなんか魚になっちまえ!」

その日は天国の扉が開いていたらしく、この呪詛が実現してしまった。たちまち、コーラは半人半魚になり、指のあいだにはアヒルのように水かきができ、喉はカエルさながらだった。コーラは陸には二度と戻らず、母親は絶望のあまり、それからまもなく死んでしまった。

イタリア発月刊日本語新聞

**COMÉVA**  
Pubblicazione mensile distribuita in Italia e in Giappone

イタリア在住日本人と日本人観光客のための情報誌

編集・発行 NIPPON CLUB SNC  
Via Torino, 95 - 00184 Roma, Italy  
Tel. & Fax : (06) 4743. 212  
E-mail : comeva@nipponclub.it  
URL : www.nipponclub.it

やがて半人半魚のコーラの噂はメッシーナの王の耳にも届く。宮殿に来たコーラに王は、「シチリアをひとまわりして、どこの海がいちばん深いか見てくるように」と言った。シチリアを泳いで一周してきたコーラは、メッシーナの灯台岬のそばは、海の底が見えなかったと答える。さらにコーラは王の命令で再び海にもぐり、メッシーナがひとつの岩の上に築かれ、その岩は三本の柱で支えられていると報告する。ただし、無傷の柱は一本だけで、一本はひびが入り、一本は折れていたのだ。「ああ、メッシーナ、メッシーナよ、いつかおまえはひどい目にあうだろう！」とコーラは予言する。

灯台岬の下の深さをどうしても知りたい王は、再三コーラをもぐらせようとするが、大きな魚におびえる彼はそれをいやがる。ついに王は、まばゆい宝石がちりばめられた王冠を脱ぎ、それを海に投げ入れて、「この世にまたとない王冠だ。それを取って来い！」と命じる。ここから結末までを引用しよう。

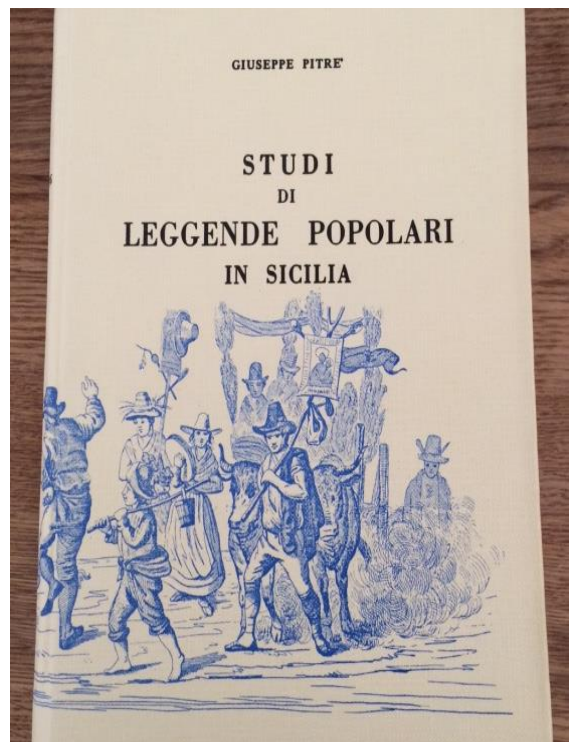
「それほどお望みならば、陛下」とコーラは言った。「おっしゃるとおりにいたしましょう。ですが、もはや二度と帰ってこられないような気がします。私にひとつかみのレンズ豆をください。難を逃れたなら、私は戻ってきます。しかし、レンズ豆が浮き上がるのをご覧になれば、それは私がもう戻らないことのしるしです」

レンズ豆をもらったコーラは、海にもぐった。

待ちに待った。長くこと待ったあげくに、レンズ豆が浮かび上がってきた。魚のコーラが帰るのを、いまだに人は待ち続けている(Italo Calvino, *Fiabe italiane*, vol. II, Torino, Einaudi, 1990, pp. 602-604)。

「ああ、メッシーナ、メッシーナよ、いつかおまえはひどい目にあうだろう！」(Missina, Missina, Un jornu sarai mischina!)というコーラの予言めいた言葉から私が思い出したのは、1908年にメッシーナを襲った大地震のことだった。メッシーナ海峡を震源とするこの地震によって、レッジョ・カラブリアとメッシーナは壊滅的な被害を受けた。犠牲者の数は、10万人にも達したという。呪いのような響きをもつコーラの言葉がまさか現実のものになったわけではないのだろう。

編者のカルヴィーノは各民話に注をつけ、典拠を示しているが、「魚のコーラ」の原典は、1904年に出版されたジュゼッペ・ピトレの『シチリアの民間伝説研究とシチリアの新伝説集』にある。この著作の主要部分が、魚のコーラ伝説にかんする研究・分析に当てられている。そしてその付録として、この伝説が書き記された、12世紀後半から19世紀にいたる一連の一次資料とともに、ピトレ率いる採集チームが聞き取って文字化したシチリアの17篇の民間伝説が収録されているのだ(哲学者のベネデット・クローチェが自らの著作で紹介したナポリ版「魚のニココロ」も併録されており、それを含めると18篇)。カルヴィーノはこの17篇のうち、彼が最も美しいとみなした *Lu Piscicola* を、シチリア方言からイタリア語に翻訳したのである。私の手元にあるファクシミリ版(Giuseppe Pitre, *Studi di leggende popolari in Sicilia e Nuova raccolta di leggende siciliane*, Bologna, Arnoldo Forni, 1981)をひもといてみよう。話者は、パレルモのペツリグリーノ山のふもととのくヴェルジネ・マリーア>地区の船乗りで、エマヌエーレ・アルマフォルテ教授によって採集されたとある。



「魚のコーラ」伝説は、早くは、12世紀後半のプロヴァンスの詩人、レモン・ジョルダン(Raimon

Jordan)の詩節のなかに、Nichola de Barとして現れる。泳ぎの達人は、メッシーナではなく、バーリの人だったことになる。また、同時代のソールズベリー司教座聖堂参事会員、ウォルター・マッブ(ラテン名 Gualterus Mapes)の著作『宮廷人の戯言』(De nugis curialium)にも、海に住むニコラについての言及があり、シチリア王グリエルモ 2 世治下(1165-1180)の人とされている。ただしニコラのあだ名を Pipe としているのは、発音あるいは筆記上のミスだろうとピトレは推測している。

ナポリの人文主義者、ジョヴィアーノ・ポンターノ(Gioviano Pontano, 1426-1503)のラテン語韻文『ウラーニア』(Urania)では、母からの叱責にもかかわらず海で暮らすようになったメッシーナのコーラの体がうろこで覆われている。ピトレによれば、これは、それ以前の記述には見られない新しい特徴だという。

そしてピトレは、これ以外にもさまざまな時代の「魚のコーラ」伝説を検証しながら、次のような結論に達するのである。伝説は神聖ローマ皇帝フリードリヒ 2 世(1194-1250)以前の時代にさかのぼる。多くの著述家が民間伝承をもとに伝説を記録した。その大半において相互の模写が繰り返された。伝説は、13 世紀と 14 世紀において、シチリアのみならず大陸全土で広く知られていた。

ピトレの論考は、「魚のコーラ」伝説に、さまざまな神話や伝説が混然となって溶けこんでいることを教えてくれる。海神ポセイドンとその息子オリオンにまつわる神話、ポセイドンの娘で、渦巻きに姿を変えさせられたメッシーナ海峡に住む海の怪物カリュプデイスの神話、さらには、メッシーナのある地域では漁師の信仰を集めていたという聖ニコラの伝説などがそれである。

『イタリア民話集』にカルヴィーノが収めたシチリアの昔話は、「魚のコーラ」以外すべて、原典はピトレの『シチリアの昔話、説話、短篇物語』(1875)全 4 巻にある。『イタリア民話集』「解説」のなかで、カルヴィーノは、300 篇の物語が収められたこの本が、民俗学の研究に一生を捧げた医師、ジュゼッペ・ピトレ(1841-1916)と彼が率いた大編成の採集チームの成果だと述べ、その功績によって、私たちは語り手の「民衆」という抽象概念から脱却できるのだと指摘している。

この大作が、装いも新たに復刊された。ありが

たいことに、原典のシチリア方言とともに、そのイタリア語訳がついている(Giuseppe Pitrè, *Fiabe, novelle e racconti popolari siciliani*, 4 voll., Traduzione di Bianca Lazzarro, Introduzione e cura di Jack Zipes, Prefazione di Giovanni Puglisi, Roma, Donzelli, 2013)。豊饒なシチリアの民衆文学が、一般の読者にも読みやすいかたちで現代によみがえったことを喜びたい。



お詫びと訂正: 8 月号の拙稿で、澁澤龍彦夫人のお名前がまちがっておりました。正しくは澁澤龍子氏です。また「装幀家の菊池信義氏」とあるのは、金子國義氏の誤りでした。謹んでお詫び申し上げますとともに、訂正させていただきます。

(上智大学講師)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館  
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4  
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357  
E-mail: [centro@italiakaikan.jp](mailto:centro@italiakaikan.jp)  
URL: <http://italiakaikan.jp/>